

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

《人社系》

●立命館大学社会学研究科応用社会学専攻

「海外大学共同による比較社会調査研究型教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・海外提携校の教員による共同授業を実施した。講義はTV会議システムを利用して行い、受講生は本学および海外提携校の大学院生の参加によって運営した。
- ・毎年4名程度海外講師を立命館大学に招聘し、授業外も含め直接コミュニケーションがとれる講義も行った。
- ・受講者個々人間でかなりの程度社会調査メソッドの習得状況の差が存在していたので、個別に履修を指導し、必要な能力の養成に努めた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・受講生は正規のGP受講生(国際比較調査まで行う)と、それ以外に任意の科目を履修できるオブザーバー制度を設け、多くの院生が参加できるよう考慮した。
- ・欧米とアジアの知的ネットワークをつくるため、特に平成21年度は海外提携校以外からも講師を迎え、グローバル化の中で進む地域の現状とその理論等について講義を行った。
- ・社会調査メソッドの修得および情報発信力の養成を目的とした履修モデルを作成し、それを履修指導に活用した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・平成21年度本科目の受講生(一期生)は、正規生3名、オブザーバー生4名の計7名(2年次に1名正規生になる)、平成22年度受講生(二期生)はGP正規生4名、オブザーバー生2名の計6名であった。海外提携校は平成21、22年度とも約5名の受講生であった。
- ・履修モデルは自己の能力形成のモデルとして役割を果たした。